

第4節 動線に関する計画

1 動線の方向性

(1) 史跡の見学動線

- ・ 利用者が史跡の理解を深めるとともに、快適に散策するため、史跡内及び周辺を含んだ動線を設定する
- ・ 史跡南東側の C-1 ゾーンから入り、視点場から史跡全体を眺めたのち史跡内へ入り、北へ向かいながら、各遺構を見学するルート推奨ルートとする（「図_見学動線計画案」67 頁参照）
- ・ 現状、史跡の東や北側から見学する利用者が多いことも考慮する
- ・ 移動に配慮が必要な方の利用を想定し、動線に応じてスロープや舗装等の整備を検討する

(2) 周辺資源等との周遊動線

- ・ 史跡周辺の資源と連携や周遊を想定し、一体的な活用が図れるよう動線の計画を設定する
- ・ 史跡内に限定せず、史跡甲斐国分尼寺跡、護國山國分寺や経塚古墳等、周辺資源との連携やさらに広域的な博物館施設や資源等を巡るルートも考慮する

2 動線に関する計画

(1) 推奨ルート

- ・ 史跡の南東の C-1 ゾーンから入り、視点場から往時の寺院空間の広がりを感じた後、回廊跡、塔跡を見ながら金堂跡・講堂跡方向へ向かい、僧房跡へ続くと想定される箇所等を見て、南へ戻る（「図_見学動線計画案」67 頁参照）

(2) 周遊ルート

- ・ 史跡からおおむね半径 1km 以内には、甲斐国分尼寺跡や護國山國分寺、金川の森といった関連する歴史資源が所在している。当該範囲は主として徒歩による周遊ルートの検討を行う
- ・ 史跡からおおむね半径 5km 以内には、山梨県立博物館や釈迦堂遺跡博物館、春日居郷土館等が所在している。当該範囲は主として自動車による周遊ルートの検討を行う

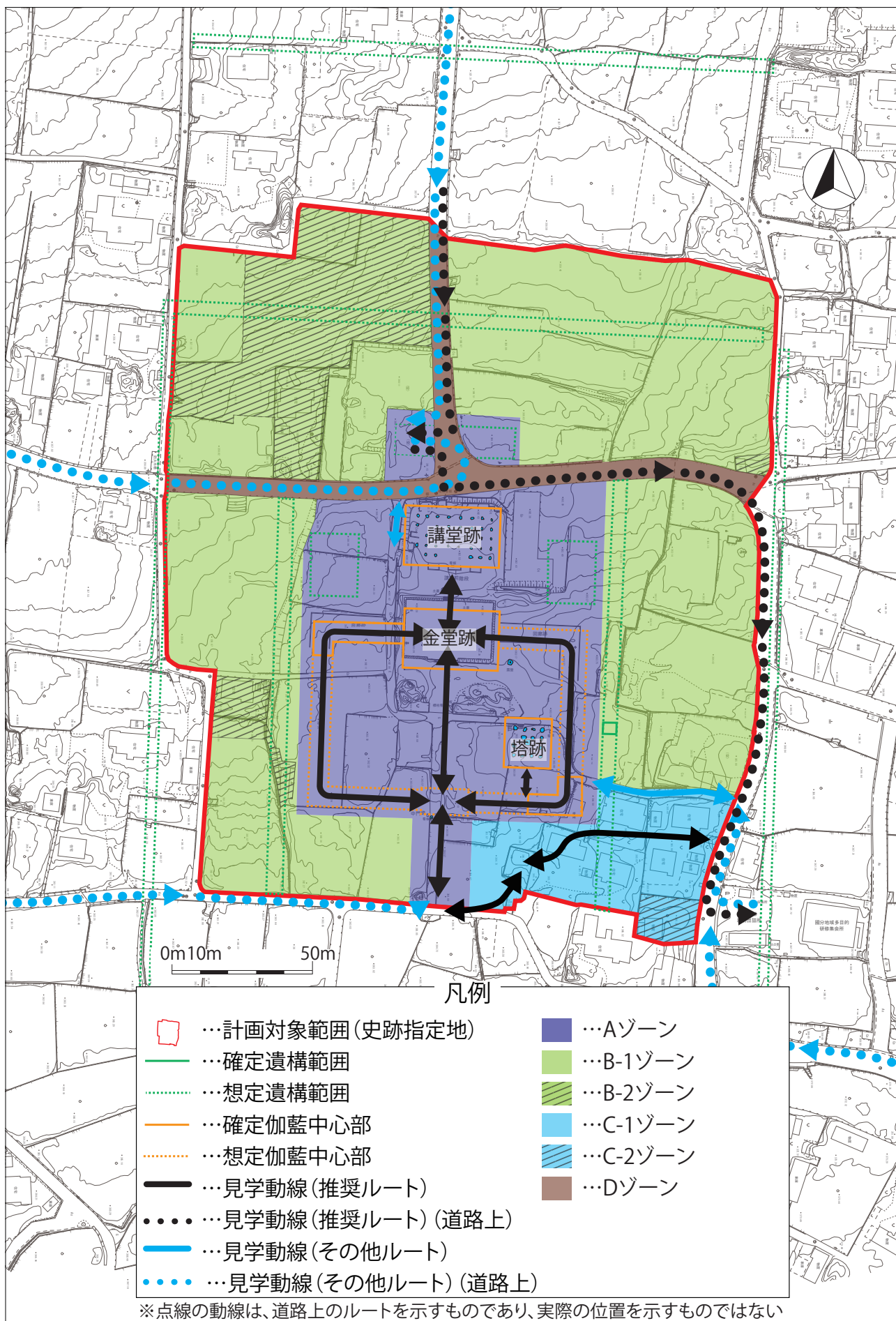
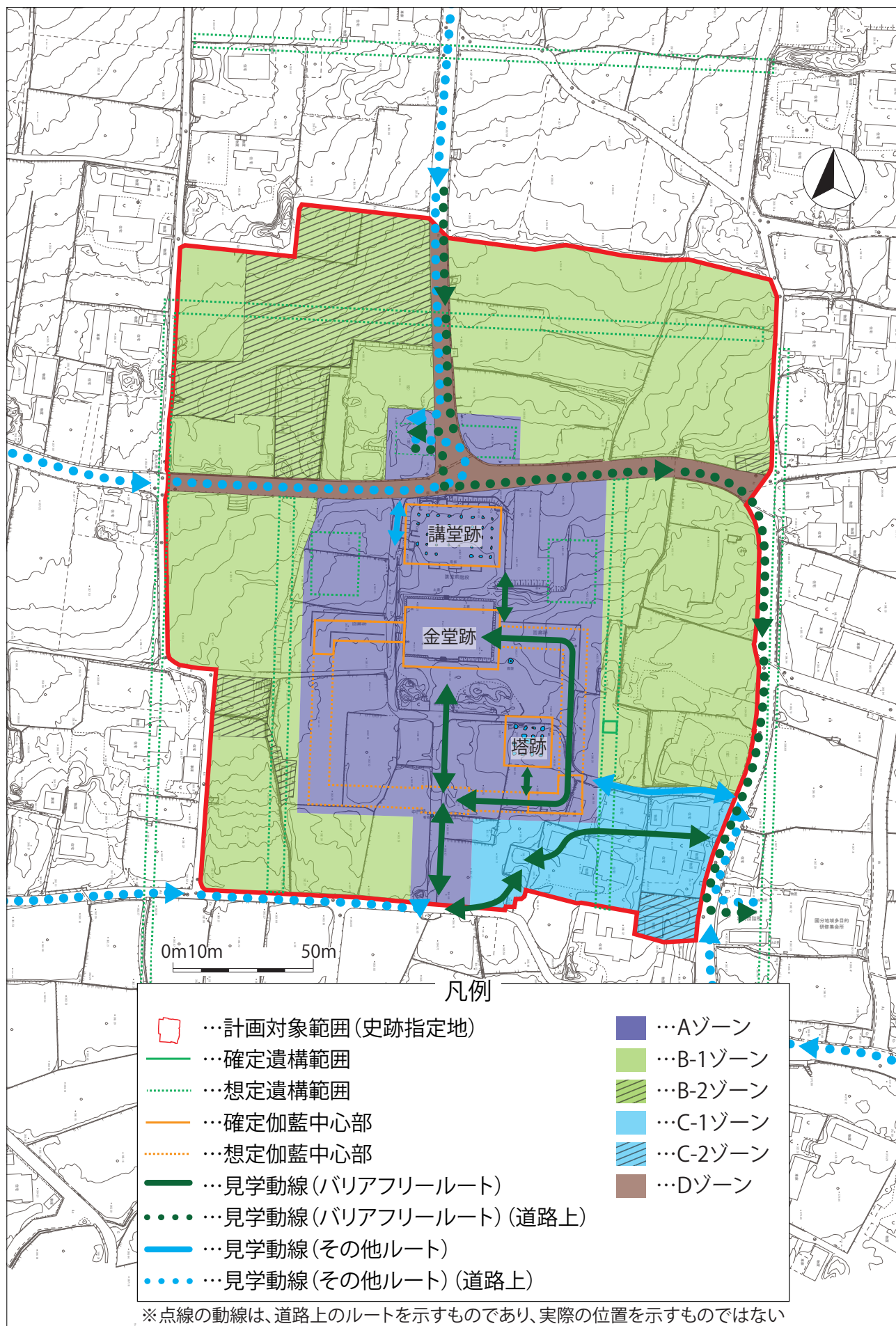
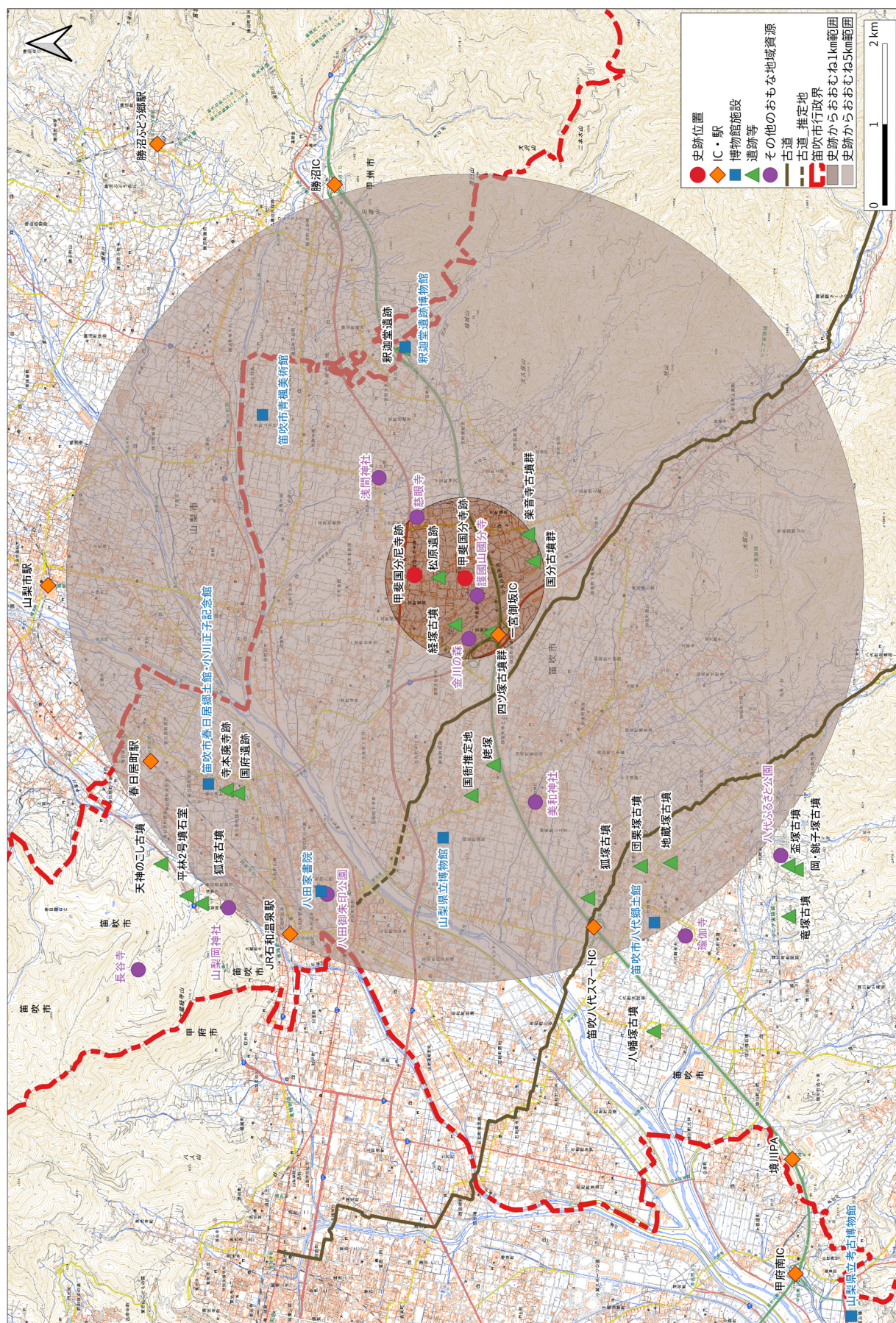


図 見学動線計画案



図_ 見学動線計画案(バリアフリー)



図_ 史跡と周辺資源位置図

第5節 地形造成に関する計画

1 地形造成の方向性

- ・ 地形造成については、ゾーンごとに計画を立てる
- ・ 史跡全体の地形造成は長期的な課題とし、本計画においては A ゾーンを中心に計画する
- ・ 史跡の価値を正しく伝えるため、発掘調査の成果に基づき伽藍と一体的に表現を行う
- ・ 遺構表現のための整備を考慮した上で、最適な地形造成となるよう計画する
- ・ 大規模な造成が必要な場合、表現方法を検討する
- ・ 石垣が地形復元に影響を与える場合は、遺構の保存を最優先し撤去や盛土等を行う
- ・ 盛土については、地下遺構に影響を与えないような土質を検討するとともに、雨水排水を十分に考慮した構造とする

2 地形造成に関する計画

- ・ 地形造成の基準となる高さは、中心伽藍付近の標高 363.0m とし、保護層の 60 cm 以上の確保を目指す。地形の状況等に合わせ必要な保護層厚を検討する
- ・ 史跡は北へ向かって傾斜する扇状地であることから、中門南側では、基準とする高さよりも高く、講堂北側では低いものとする
- ・ 保護層が確保できない箇所や、地形復元との整合性のため盛土等が行えない箇所は、張芝等により、地下遺構の保存に努める
- ・ 塔より北側の範囲においては、塔跡の礎石周辺の地表面の標高 363.8 ～ 363.9m 程度を超えない高さとする。
- ・ 地形造成を行う際、史跡景観へ影響のある樹木は伐採を基本とするが、ランドマークとしての樹木や史跡整備に大きな影響を与えない樹木、緑陰の形成等に必要な樹木については、慎重に検討した上、方針を決定する

表_ゾーンごとの地形造成計画

ゾーン	方向性	必要な措置
A ゾーン	・ 発掘調査成果に基づき、可能な限り地形復元を行う ・ 石垣が地形復元に影響を与える場合は、遺構の保存を最優先に、撤去や盛土等を行う ・ 除草について、機械等で管理することを考慮し、段差の解消など維持管理コストを抑えるための整備を行う	・ 盛土については、地下遺構に影響を与えないような土質を検討するとともに、雨水排水を十分に考慮した構造とする
B-1 ゾーン	・ A ゾーンの整備を考慮し、必要最低限の地形復元を行う ・ 除草について、機械等で管理することを考慮し、段差の解消など維持管理コストを抑えるための整備を行う	・ 地形復元を行う際には、既設水路の流路と流量を考慮した地形造成とする
B-2 ゾーン	・ 所有者の意向を確認しながら基本的には現状維持とする	・ 所有者の意向を確認しながら、必要に応じ、地形復元の方向性を検討する
C-1 ゾーン	・ エントランス整備に必要な地形造成を行う	・ 利用者の移動に支障がないよう、段差等を生じさせない地形造成とする
C-2 ゾーン	・ 所有者の意向を確認しながら基本的には現状維持とする	・ 所有者の意向を確認しながら、必要に応じ、地形復元の方向性を検討する

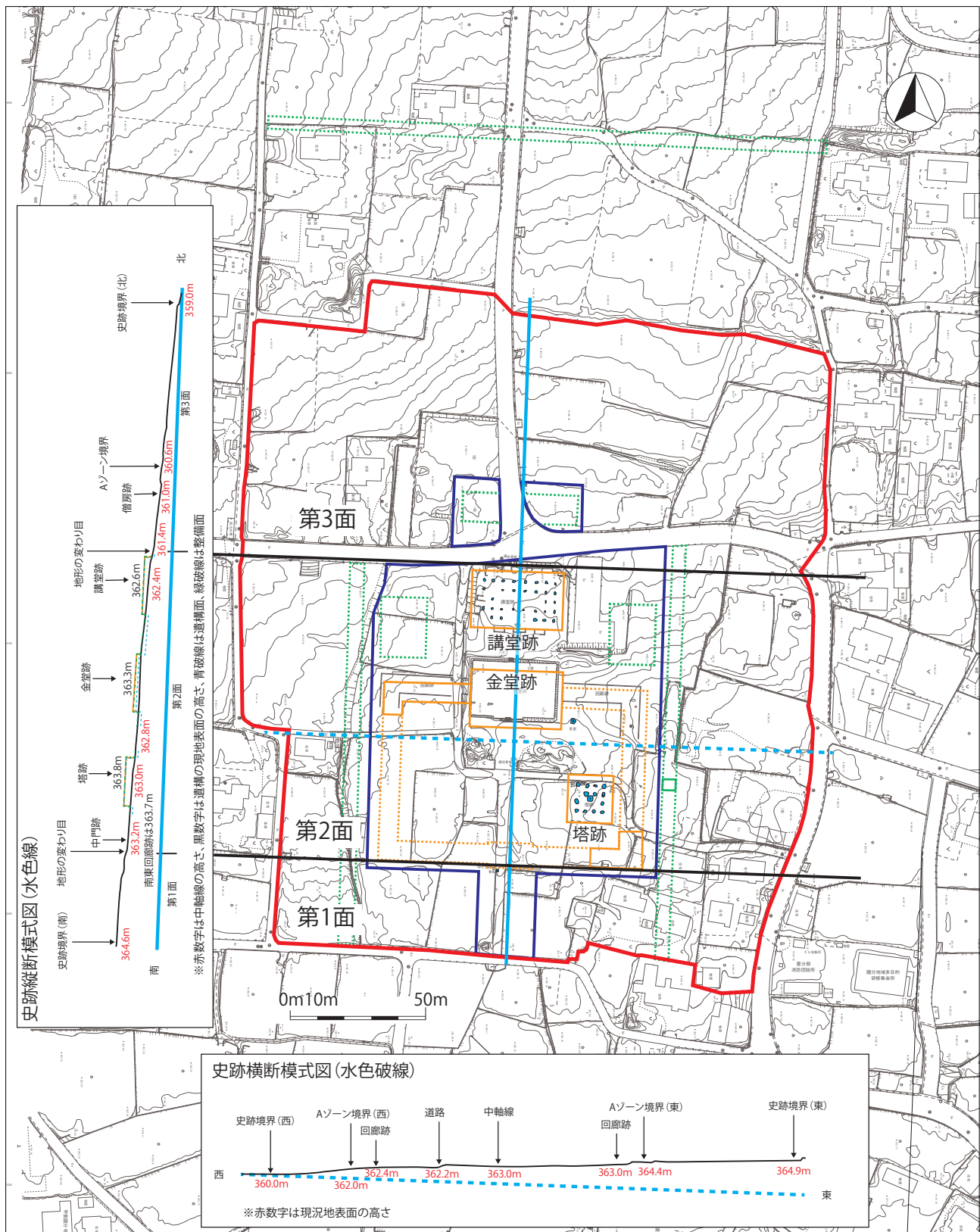


図 史跡縦横断模式図

第6節 遺構表現に関する計画

1 遺構表現の方向性

- ・ 史跡の特徴である「石の国分寺」を体感できるような整備を心がける
- ・ 発掘調査の成果に基づき、中心伽藍をはじめとした地下遺構の表示により、史跡の本質的価値を顕在化する
- ・ 遺構表現する遺構は、本質的価値を構成する要素（A）※¹とする
- ・ 遺構表示は、平面表示を行うほか、デジタル技術等も用いることを検討する
- ・ 地上に表出している礎石等の遺構については、今後も遺構の状態を日常の維持管理により把握しつつ、そのまま見学できるようにする
- ・ 地下遺構については、施設の規模を体感できるよう、遺構表現を行うものと、範囲などを簡易的に示す表示に分けるものとする
- ・ 各堂宇が建てられた年代を精査し、甲斐国分寺の最盛期の年代を基準とする
- ・ 遺構表現に必要な内容確認調査を計画的に行い、整備計画へ反映する
- ・ 遺構表現に支障がある石垣・水路については、撤去・埋設・付け替えなどを行う

※1「保存活用計画」74頁参照

区分	要素
	甲斐国分寺跡
A：史跡の本質的価値を構成する要素	■建物遺構 ・ 塔跡：礎石（14 個）、石製露盤 ・ 金堂跡 ・ 講堂跡：礎石（32 個） ・ 回廊跡 ・ 中門跡：礎石（1 個） ・ 西基壇建物跡 ・ 僧坊跡 ■その他遺構 ・ 金堂前石敷広場、金堂・講堂間石敷広場 ・ 土壇状遺構 ・ 区画溝 ・ その他地下遺構等 ■出土遺物 ・ 国分寺造営期の遺物 ・ 瓦類、墨書土器、埴等

保存活用計画 74 頁

2 遺構表現に関する計画

(1) 遺構表示方法

ア 遺構表示

- ・平成 29（2017）年度からの第一期暫定整備で整備した遺構について、露出展示を行う礎石等と合わせて、本質的価値を伝えるための整備を行う
- ・それ以外の地下遺構で史跡の本質的価値の理解につながる遺構については、平面的な表示や盛土等による基壇の立体的な表示、デジタルコンテンツ等で表示を行う
- ・土系舗装を用いる際は、色彩や経年劣化も考慮したものとする
- ・礎石等については、表出した状態で見学してもらう

イ 遺構簡易表示

- ・地下遺構のうち過去の確認調査等により、その内容や規模等が把握できているものに関して見せる範囲を定め、遺構の直上に表示し、見学できるよう計画する

表_遺構表現方法

遺構表現		表現方法	ゾーン	対象遺構
遺構露出展示		・現在地表に表出している遺構（礎石等）をそのまま展示	A ゾーン	・塔跡礎石 ・塔跡石製露盤 ・講堂跡礎石 ・中門跡礎石
遺構表示	遺構表示	・暫定整備を行った遺構について、規模や形状を体感できる整備を礎石等と合わせてデジタルコンテンツ等による整備を検討する	A ゾーン	・塔跡 ・金堂跡 ・講堂跡 ・回廊跡
		・地下遺構の中で本質的価値の理解につながる遺構についてその範囲を定め、視覚的に分かりやすく表現するほか、デジタルコンテンツ等による整備を検討する	A ゾーン	・金堂前石敷広場 ・金堂・講堂間石敷広場
	遺構簡易表示	・確認調査等の成果により、遺構の範囲を植栽またはロープ等で簡易的に表示することを検討する	A ゾーン B-1 ゾーン	・鐘楼跡・経蔵跡 ・僧房跡 ・土壇状遺構

(2) 遺構表現方法案

ア 塔跡

整備方法	検討事項	
『表出している礎石を見せつつ、塔跡の基壇一部を復元する案』 基壇範囲：土系舗装 建物範囲：土系舗装 表出礎石：そのまま見せる 復元礎石：塔跡等と同様の石材を用いて表現もしくは円形マーカー 基壇外装：石組基壇であることを塔跡等と同様の石材もしくは自然素材以外の素材を用いて表現	メリット	・ 本物の礎石を見せられることから、史跡の理解につながりやすい ・ 基壇上部の平面的な規模を礎石と一体に感じることができる ・ 講堂跡も同様の整備が可能 ・ 除草コストが抑えられる
	デメリット	・ 石材を購入する場合、表出している礎石との明確な区別が必要となる ・ 基壇上部の平面的な規模は感じられるが、基壇高さの規模を表現しきれない ・ 舗装や設置した石のメンテナンスと修繕が必要 ・ 雨水排水に留意する必要がある ・ 法面下の排水措置が必要（断面） ・ 表出させる礎石の保存処理が必要

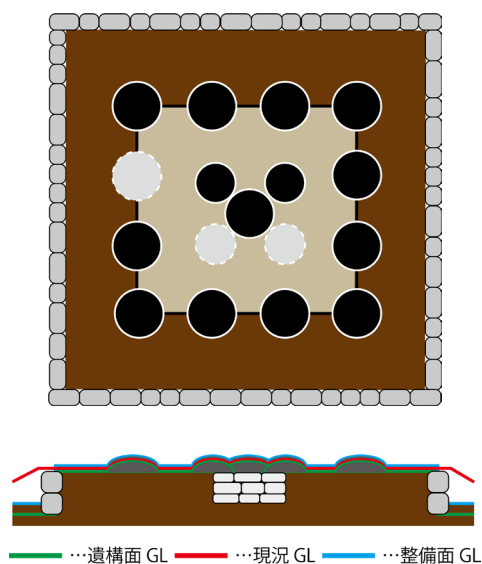


図 塔跡模式図



写真 整備イメージ

イ 石製露盤

石製露盤については、塔跡南に移設し展示を行う。

整備方法	検討事項	
『舗装上に設置し柵を設けない案』 舗装：土系舗装 柵：なし	メリット	・ 認識しやすい ・ 柵を設けないことで、より近くで体感することができる
	デメリット	・ 舗装を行うことにより、遺構表現と誤認される恐れがある ・ 舗装の修繕が必要 ・ 柵を設けないことで、人的なき損の恐れがある

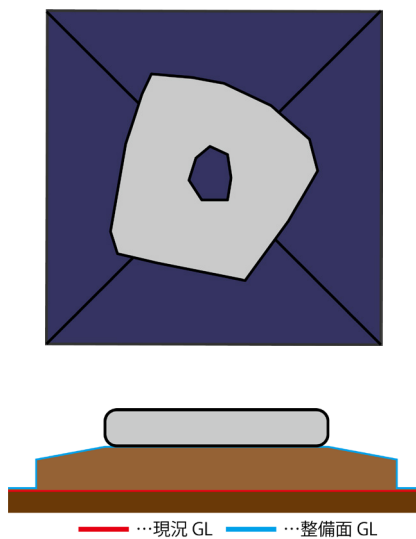


図 石製露盤模式図

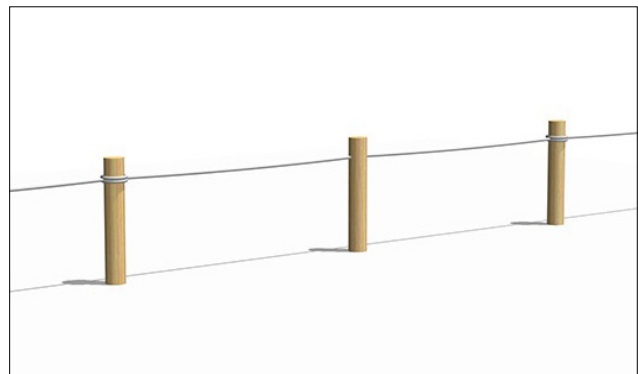
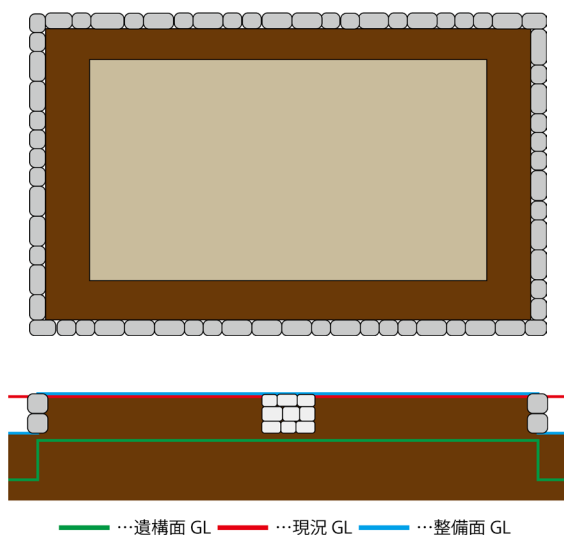


写真 柵（参考事例）

ウ 金堂跡

全ての案において、見学用の階段として、北側に暫定整備時の階段を流用することとする。

整備方法	検討事項	
『基壇範囲と建物範囲のみ表示する案』 基壇範囲：土系舗装 建物範囲：土系舗装 復元礎石：表現しない 基壇外装：石組基壇であることを講堂跡等と同様の石材もしくは自然素材以外の素材を用いて表現	メリット	・舗装のみであるため整備費を抑えられる ・除草コストが抑えられる ・低メンテナンス性 ・凹凸がないため活用しやすい
	デメリット	・解説板やパンフレット等で、建物跡があったことを伝える必要がある ・舗装の修繕が必要 ・法面下の排水措置が必要（断面）



図_金堂跡模式図



写真_整備イメージ

工 講堂跡

整備方法	検討事項	
『表出している礎石を見せつつ、講堂跡の基壇一部を復元する案』 基壇範囲：土系舗装 建物範囲：土系舗装 表出礎石：そのまま見せる 復元礎石：講堂跡等と同様の石材を用いて表現もしくは円形マーカー 基壇外装：石組基壇であることを講堂跡等と同様の石材もしくは自然素材以外の素材を用いて表現	メリット	・本物の礎石を見せられることから、史跡の理解につながりやすい ・基壇上部の平面的な規模を礎石と一体に感じることが出来る ・塔跡も同様の整備が可能 ・除草コストが抑えられる
	デメリット	・石材を購入する場合は整備費が高くなり、表出している礎石との明確な区別が必要となる ・基壇上部の平面的な規模は感じられるが、基壇高さの規模を表現しきれない ・舗装や設置した石のメンテナンスと修繕が必要 ・雨水排水に留意する必要がある ・法面下の排水措置が必要（断面） ・表出させる礎石の保存処理が必要

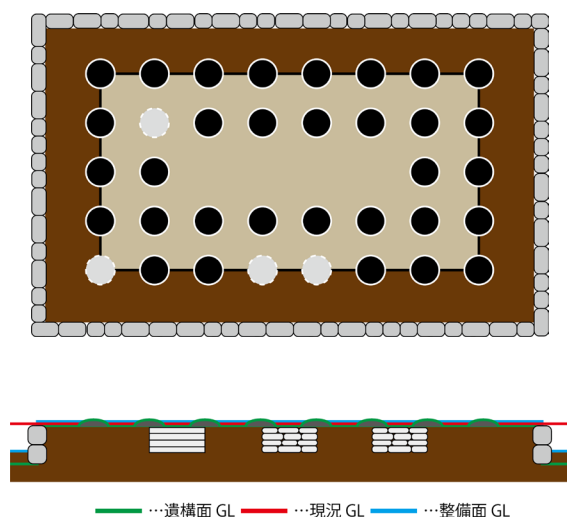


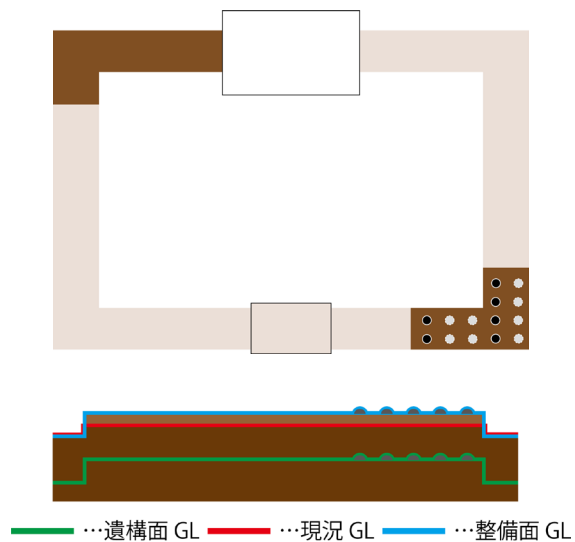
図 講堂跡模式図



写真 整備イメージ

オ 回廊跡・中門跡

整備方法	検討事項	
『遺構範囲表示し、礎石を復元する案（舗装）』 遺構範囲：土系舗装 遺構想定範囲：土系舗装（上記と色を変える） 確認礎石：円形のマーカーを設置して表現 復元礎石：円形のマーカーを設置して表現（確認礎石と色などを変える） 中門跡：土系舗装 ※南東側特に積極的に整備し、確認された礎石などを表現する	メリット	・舗装のみであるため整備費を抑えられる ・除草コストが抑えられる ・低メンテナンス性 ・凹凸がないため移動しやすい ・金堂跡③と同様の整備ができ、景観的な統一感を示せる
	デメリット	・解説板やパンフレット等で、建物跡があったことを伝える必要がある ・舗装の修繕が必要



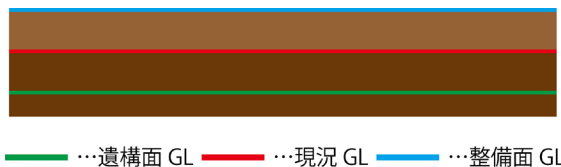
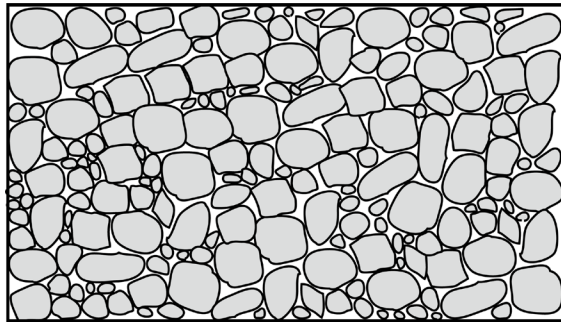
図_回廊跡・中門跡模式図



写真_整備イメージ

カ 石敷

整備方法	検討事項	
『盛土により保護し、復元する案』 復元礎石：同様の石材を設置して表現	メリット	・石敷を保存できる ・石の国分寺を疑似的に体感することができる
	デメリット	・整備費用が高くなる ・劣化やチープ化が懸念される ・メンテナンス性が低い



— 遺構面 GL — 現況 GL — 整備面 GL

図 石敷模式図



写真 整備イメージ

キ 遺構簡易表示

確認調査等の成果により、遺構の範囲を植栽またはロープ等で簡易的に表示することを検討する。



挿入予定



— 遺構面 GL — 現況 GL — 整備面 GL

図 模式図（上ロープ等、下植栽）



写真 整備イメージ（上、下植栽）